藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 59: 25–28, March 10, 2011

濱田　仁[1]・木村光子[2]：筑前国・志賀海神社の歩射祭とガラモ

これ迄，日本人と海藻の関係を求めて，古来の海藻の産地や古社を訪ねて来た。今回は玄海灘に臨む要衝の地，福岡市北部の志賀島を訪ね，海神の総本社として篤く崇敬される志賀海神社で正月に行われる歩射祭を通して，古代の人々と海藻との関わりや，その意味について考えたい。

志賀海神社

現在の志賀海神社（図 1）は，志賀島入り口の東南端に近い小高い岡の上にある。神社への入り口，石段左端には海砂の入ったお潮井箱（図 2）が置かれ，参拝者はこの砂を身体に振りかけて身を浄め，海での禊の代りとする。この地方では大抵の家で，玄関を出る際に砂でお祓いをする。神社の長い階段を上ると，射的の行われる参道がある。その奥にある太鼓型の育民橋を渡って前の楼門を潜ると広場に出る。左に社務所，右奥に本殿。ここは，古事記（712）にも登場する底津綿津見神・仲津綿津見神・表津綿津見神の綿津見三神を祀る総本社である（倉野 1958, p. 71）。三柱の神々は，伊邪那伎命が黄泉の国から戻り，海底・海中・海上で禊を行って穢れを祓った際に生まれ，各々海底・海中・海上を掌る。

本殿左奥の今宮社には，綿津見三神の子孫で，九州から山陰・長野に広がる古代海人の阿曇磯良などが祀られ，宮司は代々阿曇氏が勤める。古い伝承を取り入れた太平記（後藤・岡見 1962）に依れば，阿曇をもじった阿度部磯良は海底に住み，体中に貝や海藻が付いて見苦しい姿だったので顔を隠し，舞を舞いながら最後に皆の宴の前に登場し，三韓征伐の神功皇后の航路を守り導いたとされる。歩射祭では，海中での禊の後のガラモの舞や扇舞など，更に秋の「御神幸祭」で顔を白布で覆って舞う「羯鼓の舞」に磯良の伝説を留める。

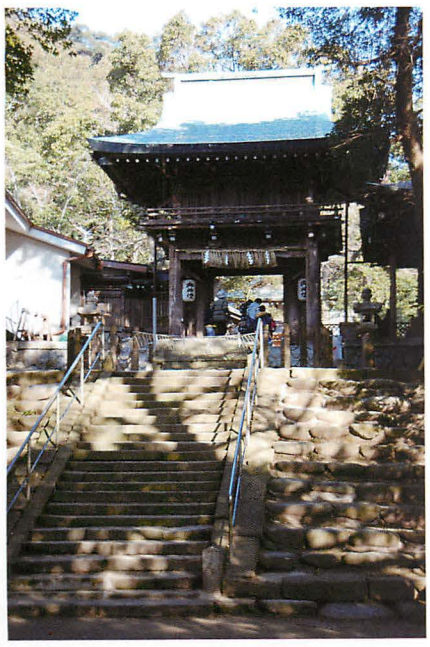

図 1. 志賀海神社楼門

歩射祭の日程

歩射祭は二十歳前の若者が弓で的を射る祭で，昔はかなり前から準備を進め，福岡県の無形文化財となっている。森山・光安（1981）に依れば，1 月 2 日に射手 8 人を選び，藁束で胴結という稽古用の的を作る作業（胴結締）を行う。若者の多かった昔，射手は名誉な役で長男が選ばれたが，近年は少子化で 8 人揃えるのがやっとである。3 日に胴結屋で稽古を始める。5 日は当年の地頭（神社に古くから奉仕する古老）を決め，射手は地頭に代わって弓を射る。自分だけでなく古老の名誉や運も背負い責任が重い。7 日は射場の祓いと射初めを行い，8 日，射手が矢にする篠竹を切り出す矢篠切りを行う。11 日以後，矢取りの少年 8 人を決め，射手はお宮に泊まりこみ，朝夕は海で禊を行う。

現在，歩射祭の神事や祭は簡略化され，土曜と日曜に合わせて 2 日間にまとめられ，2010 年は 1 月 16 日（土）と 17 日（日）に行われた。

初日：胴結舞と禊

1 月 16 日朝 9 時半から，志賀海神社入口の石段前での神事の後，神社とお旅所間の数 100 m の道を回りながら，よろめき練り歩く胴結舞（図 3）が行われた。新参の射手が袴の裾をからげ，縄に腕を入れて胴結を背負い，手に持った杓子状の杖で，磯良の故事に倣い，顔を隠している。終わると，「ポスト！」と声を掛けて胴結を台の上に降ろす。「ポスト！」は，矢が的に当たる時の擬音らしく，最終日の射的場で首尾良く矢が当る様にとの掛け声である。

午後 2 時頃，干潮を見計らい，8 人の射手は島北部勝馬の海岸に集まる。勝馬は，約 2000 年前，志賀海神社の古宮である表津宮のあった所で，現在は約 100 m の沖合にある沖の島（通称，明神）に沖津宮がある。白装束の射手は褌一つになり，新参の 3 人が騎馬を組み，首から 8 個の橙を下げた古参が馬上に乗り，沖の島へ渡る（図 4）。干潮で最深部は膝ぐらい。後からお神酒を下げた一人が続く。

皆が明神に渡ると，新参達は冷たい海に潜りガラモを採って掲げ，これがガラモかと岩上に立つ古参に伺いをたてる（図 5）。ガラモは気胞の多いホンダワラ類の事だが，正解でも始めのうちは違うと言われる。昔は冷たい海に 10 度も潜らされ，鍛えられたそうである。こうして十分に潔斎すると，やっと許しが

出てガラモを持って岸へ上がる。新参は一人ずつ岩上に立ち，ガラモを掲げて顔を隠し，3度右に回り能の様に舞う（図6）。終わると，島の頂きの沖津宮への約100 mを8人全員が掛け声と共に駆け上がり，沖津宮の前で再びガラモを掲げて3度回って舞い（図7），神前にガラモを奉納する。この後，持参した橙を半分に割って盃とし，御神酒を頂く。この橙酒は冬期島の人達がよく飲む酒で，とてもうまい。

射手達は沖の島から戻ると浜で着衣し，近くの仲津宮に参る。一同神前で横向きに対座し，新参はガラモの代わりに，少し広げた扇を面前に掲げ，簡単な白装束で唱和して3度回って舞う。一巡すると一同立ち上がり，「ポスト！ヨイヤ！」の掛け声と共に手を突き上げ，神事は終わる。

二日目：歩射祭

1月17日朝9時から志賀海神社拝殿で神事があり，その後の直会（なおらい）で，新参の射手はお神酒を頂き，仲津宮の時と同じ「扇舞」を今度は正装で3度回って舞う（図8）。終わると一同今宮社へ移り，着座して同様の神事を行う。神饌には鯛3尾とワカメが三宝に載せてあった。

その後，本殿から広場へ大的が降ろされ，広場を回る的回りの式が射手の統領，指揮者を意味すると言われる「いとうべんさし」を先頭にして行われる。

射手が着座すると射的が始まる。大的までの距離は32歩(約20 m)。両側には縄が張られているが，後方からは神職が床几に腰掛けて見守り，大勢の観客が覗き込むので射手にとってはかなりの重圧である（図9）。射手は一人2本ずつ，3回に分け，合計6本の矢を射る。2人ずつ進み出て射的を始める。一人が2本射て，中央の黒丸に当れば観客も含めた参会者全員が「ヨイヤ！」の声を上げる。射的は，6本全部が命中するのは「位負け」といって良くないとされ，最後の1本をわざと外す。1本だけ当たると何とか体面が保て，地頭の家で夕方のご馳走を頂けるので「節食（せちく）い矢」と言う。全部外せば「スノコリ」と言われ，射手本人も家族も大変な屈辱と落胆を味わう。昔は，参会者は結果を口外出来ず，実際，我々がお世話になった家のお婆さんは40年も知らなかった。時代は変わり，今回お世話になったある方は，40年前の「スノコリ」の辛さを語ってくれた。

午後1時半頃，行事は全て終り，参会者は競って的を破り，家に持ち帰る。魔を払うまじないに，門口に飾り付けるのである。

考察

志賀島は，1世紀の後漢時代には奴（な）国の一部で，後漢とも交流があり，光武帝が西暦57年に「漢委奴國王（かんのわのなのこくおう）」の金印を与えた（後漢書倭伝，石原1951）。魏の時代（220–265），「奴国は2万余戸を有し，男子は大小の区別なくみな顔や体に入れ墨し，大魚・水鳥の危害を厭（はら）った。水人は，深浅に関わらず，みな潜って魚やアワビを捕えていた。また，大人の敬するところをみると，ただ手を打って跪拝のかわりにする。人が死んで埋葬が終わると，一家をあげて水中に潜り体を洗った」（魏志倭人伝，石原1951）。現在も残る宗像地方の鐘崎の潜水漁や，また，二礼二拍手一礼を行い水浴して禊を行う神道の起源は少なくとも魏の時代に遡るのであろう。

その中で，志賀海神社の綿津見三神は，伊邪那伎命が黄泉の国から帰り，穢れた体を洗った際に，天照大神や建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）に先立って生まれたとされる（古事記712，倉野1958）。5世紀半ばから8世紀半ばに詠まれた歌を集めた万葉集（760年頃，大伴家持編著）に，「ちはやぶる金の岬（宗像地方の鐘崎）を過ぐれどもわれは忘れじ志賀の皇神（すめかみ）」（万葉一二三〇）（中西1980，p. 116）とある様に，志賀海神社の綿津見三神はひときわ尊敬された。

一方，「志賀の海人（あま）は藻刈り塩焼き暇（いとま）なみ髪梳（くしら）の小櫛（おぐし）取りも見なくに」（万葉二七八）（中西1978，p. 190）とか，「志賀の白水郎（あま）の釣し燭（とも）せる漁火（いさりび）のほのかに妹を見むよしもがも」（万葉三一七〇）（中西1981，p. 165）とある様に，志賀島の海人は忙しく藻を刈り塩焼をし，漁を行った。また，「日本では正月一日になるごとに，射戯・飲酒する習慣がある」（隋書倭国伝656，石原1951）とあり，少なくとも隋の時代（581–618）には歩射祭があったと考えられる。

歩射祭では射手が清浄で神聖な海藻，ガラモを採って舞い，神前に奉納する。ここでは，ガラモを採る事と海中で禊を行う事の両方に意味があるようである。

まず，ガラモは食材（ホンダワラ，アカモク）や薬材（ウミトラノオ，虫下し）として重要であるが，製塩（濱田ら2010）や肥料に大量に使われ，古来非常に有用かつ貴重で，日本人の精神生活にも深く結び付いたと思われる。島の岩上と沖津神社の前で3度回る素朴な「ガラモの舞」は，周囲の海にガラモの豊漁を祈願する舞ではないだろうか（図6，7）。その起源は恐らく，「漢委奴国」以前に遡り，後世，仲津宮や本社拝殿で行われる「扇舞」に発展し，幽玄な能の舞などにも影響したように思われる。

また，ガラモ採りでは海中に何度も潜り，禊が行われている事になる。これは，神道の理念・作法と結びついた行為で，同様の事は隠岐・玉若酢命神社の馬入れ神事（濱田2007）にも見られる。

ガラモは，志賀島ではホンダワラ類の事である。気胞が沢山付き，振ればガラガラと音をたて，神の好むガラガラ（鈴）を連想させ，清浄・神聖な海藻とされる。その音は神を呼び覚まし喜ばせると考えられている（阿曇磯和氏，私信）。ガラモはウミトラノオにフクロノリが付着したものと神社の資料にはある。付着器がなくまた老成しているので断定は難しいが，ホンダワラ類のイソモクの様であった（図7）。恐らく，イソモクでなくても，気胞の付いたホンダワラ類であれば良いのだろう。

ガラモ（ホンダワラ類）に対する日本人の思いは，1）魚介類や海藻を無限に生ずる海は生命力に満ち，清浄で神聖である（濱田2009b）。2）古代においてガラモは製塩（濱田ら2010）や肥料・食料として使われ，やはり清浄・神聖であった。3）裸になって海で禊をし，証拠としてガラモを採り，海の神に供える（志賀海神社）。4）そのガラモ（ゲバサモ）を食

図 2–9. 歩射祭。 2. 志賀海神社入り口階段下の御潮井(清めの砂)。「御砂を体の左・右・左と振り,ご参拝下さい」と書かれている。 3. 胴衣を担ぎ,神社とお旅所の間を回りながら練り歩く胴衣舞。後方に神社入り口の階段と鳥居が見える。 4. 新参は騎馬になり,古参を乗せて対岸の沖の島に渡る。沖津宮の鳥居が左に見える。 5. 沖の島では,新参は海に潜って禊をし,採った藻がガラモか否か,左端の古参に問う。 6. 一人ずつ,採ったガラモを掲げて岩の上で 3 度回って舞うガラモの舞。 7. 沖津宮におけるガラモの舞。このガラモはイソモクと思われる。 8. 本社拝殿に於ける扇舞。射手達は正装している。 9. 歩射祭の射的。真ん中の黒丸の中心に矢が命中したところ。後方で神職が見守る。

べると穢れが祓われ，生命力を回復する（例：宗像大社，木村・濱田 2009）。5）海から離れた所では，ガラモ（ジンバ）でお祓いを行い，海での禊の代わりにする（佐太神社など，濱田 2008a）。6）ガラモ（モ）で火魔を祓い（宮地嶽神社，濱田 2009a），建物やその他総ての穢れの祓いに用いる（韓神新羅神社，五十猛神社，濱田 2002）。7）ガラモの代わりに大麻（おおぬさ）を用いる（濱田 2008a），と進んだのではないだろうか。

志賀海神社で4月に行われる山誉種蒔漁猟祭（やまほめたねまきすなどりさい）では茂った山を誉め，山野と海の豊かさを称える。古代人は，ガラモが塩焼や肥料に重要な事を日々体験し，海と陸との生態的に密接な関係を理解していたのであろう。

歩射祭では，古来戦闘上重要であった弓術の向上が図られる一方，古老の名誉と運を代行し，矢取りや世話役，見守る島民との一体感がこの時間に凝集される。この祭を通して，若者達は海神を敬い，生活を律して身を浄め，先達に学び，同世代との絆を深め，次の世代へと引き継ぐ。日本有数の古社，志賀海神社の古い祭の重要な潔斎に，ホンダワラ類が関係して来たのは，それがまさに古代海人の日常生活に発した祭の故であり，日本の宗教文化の根幹を成して来たからではないだろうか。

謝辞

一昨年11月1日に急逝された志賀海神社の故阿曇磯和宮司，神職の方々，氏子の泉昭浩氏と坂本　明氏，及びそのご家族の方々にお世話になった。国立科学博物館の北山太樹博士，東邦大学の吉崎　誠博士，京都大学の鯵坂哲朗博士，鹿児島大学の寺田竜太博士には，貴重な助言を頂いたり，ガラモの同定をして頂いた。これらの方々に心から感謝したい。

引用文献

後藤丹治・岡見正雄 1962. 太平記三. 日本古典文学大系 36. pp. 456–457. 岩波書店.

濱田　仁 2002. もっと藻の話 (29) 韓神新羅神社と海藻文化. 実業之富山 57 (12): 24–25.

濱田　仁 2007. もっと藻の話 (57) 隠岐國・玉若酢命神社の祭と海藻 (1). 実業之富山 62 (8): 28–29.

濱田　仁 2008a. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社. 藻類 56: 35–38.

濱田　仁 2009a. 筑前國・宮地嶽神社の鎮火祭と「モ」. 藻類 57: 152–154.

濱田　仁 2009b. 日本人の海藻利用. 海藻資源 21: 40–57.

濱田　仁・木村光子・村岡大祐 2010. 御竈神社の藻塩焼神事とアカモク. 藻類 58: 133–137.

石原道博（編訳）1951. 新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝.（魏志倭人伝 pp. 78–82),（後漢書倭伝 p. 89),（隋書倭国伝 pp. 98–99). 岩波文庫. 岩波書店.

木村光子・濱田　仁 2009. 宗像大社の古式祭とアカモク. 藻類 57: 7–9.

倉野憲司（校注）1958. 古事記. 日本古典文學大系 1 古事記 祝詞. pp. 3–361. 岩波書店.

森山邦人・光安欣二 1981. 志賀島の四季. pp. 20–57. 九州大学出版会.

中西　進 1978. 万葉集 全訳注原文付(一). 425 pp. 講談社文庫. 講談社.

中西　進 1980. 万葉集 全訳注原文付(二). 405 pp. 講談社文庫. 講談社.

中西　進 1981. 万葉集 全訳注原文付(三). 345 pp. 講談社文庫. 講談社.

([1] 〒930-0194 富山市杉谷 2630 富山大学医学部保健医学教室, [2] 〒145-0062 東京都港区南麻布 2-14-9-2F（株）IDD)